
オリジンブラッド・イモータル

絃城恭介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オリジンブラッド・イモータル

【Nコード】

N9152Y

【作者名】

絃城恭介

【あらすじ】

人間には生まれながらにして前世の記憶が刻まれ続けている。それは言葉であり、経験であり、意味である。それを総称したものを科学者たちは『オリジン起源』と名付けた。

水城緋雨は『ブラッド血』と言う諸刃の剣の起源を覚醒させる。

前ノ蔵眷属は最強の名をひたすらに追い求めてきた。その結果、慢心をし水城緋雨に敗北する。

彼は己の驕りに気が付き、初めからやり直すと決意する。

彼らは何を思い、何をするのか……

絃城恭介作品第二段、オリジンブラッドイモータルよろしく願
いします。

プロローグ（前書き）

プロローグ

一章

1 想いと誓いのカタルシス

2 日常パラノイア

3 始まりのゲシュタルト

4 衝動のアスペクト

二章

未定

プロローグ

とある青年の話をしよう。

誰からも認められることが無く、誰かに認められようと血反吐を吐く思いで努力をしてきた青年の物語を。

その青年の望みは切ないものであった。

誰かに認められたい、自分を馬鹿にしてきた者たちに自分の有能さを知ってもらいたい、と、そう願って歩き続けてきた。

誰しもが一度はその苦痛を知り、その境地を乗り越え、手にする事のできるような小さな理想。

だからこそ青年は諦めると言うことだけはしなかった。

諦めると言うことは、自分の今までしてきたことを無に帰す行為だと知っていたから。

例えばそれが誰かの犠牲の上に成り立つ望みであったと悟り……

自分の望みを叶えると言う事がどれほどの死を生み出すかと言うことを理解したとしても……

一度は絶望こそしたが、彼は己の中に眠る起源を覚醒させることに成功させる。

彼の起源は『^{フリッド}血』と言う五大属性に当てはまらない特別なものであった。

起源を覚醒させた彼はとにかく喜んだ。だがしかし、それと同時に喜び以上の絶望を再び味わうこととなった。

何故なら彼の起源である『^{フリッド}血』を使用するたびに、彼の身体は吸血鬼に変わっていくと言う事実を理解してしまったから。

だが、それでも良いのだと彼は自分を偽り納得させた。

他者の血を奪わなければ碌に起源能力を使用することができずとも、生きていく上では特に関係ないと。

しかし、青年は気付くのが遅すぎた。

この都市に入ったと言うことは、

否応無しに戦火の中に放り込まれ、

誰かの命を奪うことになると言うことに。

そんな基本を、今まで覚え続けていることができたのなら、少年は苦しむ必要など無かった。

人間としての生を捨て、本能のままに生き血を啜り、本物の化け物として自身を完成させていたのなら、青年は今までのような人生を送っていただろう。そこには苦痛は無かっただろう。

だが、青年は違った。

誰かの血液を奪うことに罪悪感を感じ、起源オリジン覚醒者に虐げられる起源持ち（マテリアル）に手を差し伸べずにはいらなかった。

誰よりも特別な力を持ち、誰よりも心の優しかった青年は——
余りにも人間過ぎた。

その優しさのせいで、青年は幾度も絶望を味わった。生死の境界線に幾度と無く立った。

親しい友人が居た、想いを寄せる人が居た。

その者たちの前で能力を使ったびに、青年の周りからは少しずつ人が離れていった。それでも青年は己の生き方を変えることはしなかった。

離れ行くと知っても、助けたい誰かに手を差し伸べ、感謝され、そして畏怖される。いつでも青年は束の間の幸せを手放すことはできなかった。

そして今、青年は最大の決断を迫られている。

常人の視力の外の距離にある場所に、三桁では収まらないほどの人間が建物を警備しているのが見える。

凍えるほどに冷たい夜風は、ビルの屋上に立つ青年の身体を無常

に吹き荒んでいる。

そんな夜の暗闇に包まれた冷たい世界で、青年は葛藤していた。

「これで失敗したら僕は『不^{イモータル}死』の少女を二度と救えない……けど、本当にそれでいいのか、僕は」

たった一度のミスで都市の全てを敵に回すような危険な挑戦。それで得られるものはたった一人の少女の笑顔だけ。

それでも、青年は少女を助けたいと思う理由は二つある。

一つ目は、ついに輸血パックによる血の摂取では肉体を維持させることが不可能になったと言うこと。

二つ目は、過去にたった一度だけ見た少女に「たすけて」と言われたような気がしたから。

「名前も知らない人間に、直接言われたわけでもない言葉のために僕は、全てを敵に回す覚悟はあるのか」

青年の答えは既に決まっていた。

どれだけ自問自答を繰り返したとしても、この問いに対する答えは一つしか持ちえていないのだから。

「は……僕は、過去の僕と決別するんだろ。誰にも認められないことに苦しんでいた僕と——」

青年の呆然としていた表情が変わった。

その表情は、葛藤の末に自ら答えを決めたものにしかできないような晴れやかな表情であった。

ただ誰かに認められたいという想いの元に生きてきた青年が、ようやく気が付くことのできた新たな想い。

ゆったりとした動作で青年は輸血パックを胸ポケットから取り出すと、それを一気に飲み干す。

「僕は、この気持ちだけは裏切らない。偽るつもりは無い——」

次の瞬間、青年——水城^{みずき}緋雨^{ひさめ}は言いよつの無い高揚感に包まれた。

全身を熱く煮えたぎったような血が駆け巡り、心臓がドクンと一つ大きくする。緋雨はこの状態になった血液のことを魔血^{イビルブラッド}と呼ぶ。

文字と呼び名の通り、魔の血。

他者の血を摂取した場合に自然に発動し、使用者である緋雨の身体機能を全体的に上昇させ、人間をはるかに凌駕した身体能力を得ることができる。

つまり、ビルの屋上から飛び降りることくらい緋雨にとっては造作も無いこととなるのだ。

軽く地面を蹴りつけ、隣のビルに跳び、目的の建物に向かって一直線に夜空を駆ける。黒い閃光となった緋雨を常人の視力で捉えることができるはずも無く、三桁を超えるほどの警備員共は何の意味も無く突破された。

建物の中に進入をした緋雨は何の苦も無く『不死』の少女の居る部屋に辿り着けた。

部屋の前に立ち、名も知らない少女を助けに来た緋雨は思った。

（これじゃ、僕が悪役みたいだな……）

そして、扉を開けた彼を待っていたのは『不死』の少女と、素知らぬ表情で待ち構えるように立っていた男が一人。

「よう、オリジンブラッド。常々アンタとは戦ってみたいと思ってたんだよ」

オリジンブラッド。それは水城緋雨に付けられた通り名である。

「僕は出来る事なら戦いたくない……彼女を此方に渡せ」

「おいおい、つれないねえ。俺はアンタの敵で、アンタは俺を倒さないと不死の少女を奪えない。だったら殺りあうしか無いだろ？」

「時間が無い……殺されても文句は言うなよ——なにせ、僕は化け物だからね」

無表情のまま、冗談のような口調で言い終えた緋雨は、ベルトに付けているホルスターからナイフを取り出す。

「オリジンブラッド……俺を馬鹿にしているんじゃないだろうな？」

男の問いに、緋雨は答えることなく……

取り出したナイフで自分の掌を串刺しにした。

「勘違いするなよ起源覚醒者……これが僕の戦い方だ」

流れ出る血液が地面に零れることなく、重力に逆らい刃を形成していく。酸素と結合したことにより真紅の血液はどす黒い赤となり、無骨な石の刃のような形状になった。

しかし、絶えず流れ続ける魔血によって形成された刃は一定間隔で鼓動を刻み、まるで生きているかのような錯覚を覚えさせる。

緋雨はこの魔血で生成した刃を『傷つけるモノ（ラクサーシャ）』と呼ぶ。

「臆したなら恥も外聞も無く逃げろ。これを見てもなお、僕と戦うと言っのなら容赦はしない」

怒気も覇気も何も無い、無表情で緋雨は男に告げる。

だが、男には逃げると言う概念が存在しなかった。目の前に存在する緋雨と戦う日を待ち望んでいた男にとって、緋雨の言葉は心を躍らせるだけであつた。

ただ最強の称号を目指してきた男に、恐怖など存在しない。在るものは戦闘に対する高揚感と、勝利をした時に得られる快感のみ。

「ハッ、容赦しないだあ？ 笑わせんなよ、オリジンブラッド。俺はお前に勝つためにここに居る。逃げるって言うのは死ぬことを言うんだよッ！」

だから男は緋雨に向かって自分の全てを見せるつもりであつた。

否、見せるはずだつたのだ。

「なら……覚醒者千人を同時に相手取って倒せるくらいに強くなれ」
しかし、男に待ち受けていたものは絶望と苦痛であつた。

「な……あ、嘘……だろ——こんなはずじゃ……」

緋雨のラクサーシャによって腹部を突き刺された男は血液を流すことなく倒れ伏せた。

「……世界は『じやなかった』に溢れている。殺すつもりじゃなかった、傷つけるつもりじゃなかった、そんな言葉は嘘だ。全部わかっていてそれを言うんだ。逃げるための口実、僕はそれを自分で

経験してきて知っているよ。そんなものは自分の甘さに過ぎないって」

だから――

そう言つて緋雨は言葉を紡ぐ。

「悔しいと思つたのなら諦めるな。何でもいいからその意思を強く持つて」

「それは詭弁だ……オリジンブラッド……俺をここで殺さないとお前はきつと後悔するぞ……俺は、お前を必ず殺す」

そんな事を最後に呟いて男は完全に意識を失つた。緋雨はそれを見届けると、ただそこに座り込んでいる少女に手を差し伸べた。

少女は緋雨から差し伸べられた手を掴むべきか、掴まぬべきかを迷っているのか手を出しては引つ込め、緋雨の顔を見ては俯くと言ふ動作を繰り返している。

緋雨はそれに対して何も言うことなく、ただこの手を握ってくれるときを待ち望む。強制するつもりも無い、緋雨はあのときに聴いた言葉を信じるのみ。

だから、いつまでも待つつもりであつた。

そんな時、少女から問いかけるような言葉が口にされた。

「なずなを助けることに……何の意味があつたの？」

そんな問いかけをされた時、緋雨は迷ふことなく、初めから己の中に存在していた言葉を口にした。

「たすけてつて言われた気がしたから」

緋雨がそう言つと、少女はいつの間にか差し伸べられていたその手を掴んでいた。

緋雨も、掴まれた手を決して離さないように握り返す。

これが『不死』の起源覚醒者である少女と、『血』の起源覚醒者である緋雨の始まりの一步である。

「助けに来てくれてありがとう」

少女は、満面の笑みで緋雨に微笑んだ。

プロローグ（後書き）

1 想いと誓いのカタルシス

1 想いと誓いのカタルシス

現代科学の語るところによれば、起源とは一種の超能力のようなものであり、誰にでも生まれたときから魂に情報として備わっているらしい。

多くのものはその魂に五大元素に属する起源を備えている。しかし、ごく少数にそれらの起源とは全く別の特別な起源、希少起源が発生することがある。

それは『七つの大罪』^{グレゴリウス}や『不死』^{イモータル}、『言葉』^{ワード}、そして『血』^{ブラッド}といった発生源が確定していないものである。

だが、その他にも『多重起源者』^{デュアルオリジン}といった複数の起源を一つの身体に宿した人間も存在する。

—— かいつまんで要約すれば不死の少女、桂燈^{けいとう}なずなが緋雨から受けた説明はそのような内容であった。

「つまり、僕や君は希少起源者に当たる存在になる。ただの起源者たちと違って、僕たちのような存在は科学では説明されていないことを解明するための材料にもってこいなんだよ。それが幸福なのか、それとも不幸なのか……それを決めるのは自分自身だけだよ」
何かを思い出すかのように、自嘲気味に説明を続ける緋雨。

窓が南側に二つだけ存在し、六畳半の部屋には木製のテーブルが一つとソファが一つ、そしてベットが一つだけある。そんな部屋でなずなは緋雨と二人っきりだった。

「緋雨は起源覚醒者になったことを後悔している？」

だから、なずなは緋雨に確かめようと思った。

緋雨が語ることは全て偽りの無い事実であると、何故だかわからないが、なずなはそう思い込んでいる。

そして何より、起源について説明をする緋雨の表情が気に掛かってしまった。

「きつと僕は後悔していた……」

「……していた？ どうして過去形なの」

「していたからだよ。けどね、過去に縛られることほど無意味なことも無いって知ってる。だから、今は後悔してはいないと思っている」

「思っているって、結局どっちなの？」

「なずなは緋雨から帰ってきた言葉がどちらなのか理解できずに、緋雨に答えを催促する。」

「緋雨としては、自分が起源覚醒者になったのは自信の目標であった他人に認められたいと言う思いがあったために起源覚醒者としてここに存在している過去がある。」

「だから、答えと言うものは存在しないと言ってもいいのだ。」

「あえて言うならどっちなんだろうね」

「よって、返答も曖昧なものになる。」

「緋雨はいじわる……」

「だが、そんな答えでなずなは納得できない。緋雨の言葉は言葉遊びのように聞こえ、なずなは結論的に呟いていた。」

「ごめんごめん、謝るよなずな。けどさ、今の答えが僕にとっての答えなんだ。だからね、ちゃんと言葉にできるようになったその時、もう一度質問をされたら答えるって約束するよ」

「緋雨の言葉になずなは上目遣いで聞き返す。」

「本当に？」

「ああ、本当さ」

それに対し、緋雨もまっすぐにその眼を見て答えた。

お互いに数秒見詰め合っているうちに、緋雨は恥ずかしくなつてしまい眼をそらす。なずなはそんな緋雨を不思議そうな眼で見ながら、何かを思い出したかのように再び質問をした。

「緋雨の起源は『血』……それって、どんな能力なの？」

「ああ、それなら——」

そこまで言いかけたところで、緋雨は真実を述べるべきか否かを悩んだ。

『助けに来てくれてありがとう』

その言葉が緋雨の心に響く。

初めこそ、不死ならば目立った行動をするまでも無く血液の供給源を得られる。そんな利用しようと思う気持ちと、本当に助けたいと言う気持ちが存在していた。

だがそれは、結論だけを言う并利用するためだけに助けたと言うことになる。

つまり緋雨がなずなにしようと思っていたことは、今までなずなが囚われていたところの人間がなずなにできてことと変化がないということ。

「……緋雨？」

利用することは何も悪いことではない。弱肉強食が世の中の摂理であり真実だ。

だが、それでは何も変わらない。

変わらないのだ。

「言いたくないなら言わなくてもいいよ……だって、いつか教えてくれるんでしょ？」

「なずな……」。ああ、いつか話すよ。きっと、いつか」

緋雨がそう答えたところで、なずなが小さく欠伸を漏らす。

緋雨が時間を確認すると深夜2時を回ったところであつた。

「緋雨……なずな眠い」

「そうだね。時間ももう遅いし……なずなはベットで寝ていいよ。僕はソファで寝るから」

「うん…ありがとう」

なずなは部屋の隅に設置されているベットに向かって、うつらうつらと眼をパチクリさせて歩いていく。その後ろ姿は手に大きなウサギのぬいぐるみを持たせたらきつと可愛いのだろう。

緋雨はそんなことをなずなの後ろ姿を見て考えてしまった。不覚にも、自覚は無いが笑いが零れ出てしまっていた。

「ふふっ」

「どうしたの？」

その声が聞こえていたらしく、なずなは今にも閉じてしまいそうな瞳で緋雨を見つめながら不思議そうに聞くのだ。

「いや、なんでもないよ。おやすみ、なずな」

「うん、おやすみなさい」

夜、それは緋雨にとっては長い長い時間である。昼間とは違い、人工の光は夜の街をさんと輝かせている。

酒を飲む者、大勢で群がる者、嫌がる女性を襲う者……実に多くの人間の本性が垣間見ることのできる時間帯である。

『血』の起源を覚醒させてからと言うもの、緋雨には睡眠欲があまり現れなくなった。確かに眠いかと言われれば眠いのだろう。だが、それは今までの習慣の名残であり、実際に眠る必要があるかと言われるのなら必要は無いのだ。

眠る必要がないということは確かに便利である。しかし、それは同時に人間としての機能が足りなくなったと言うことの現われでもある。

だから、緋雨は人間として他者を観察する。その行動はきつと、大切な何かを失ってしまわないように行っている、云わば自衛行動なのだ。

人としての在りようまで忘れてしまわぬようにと。

「なずな……君は僕の正体を知っても、また「ありがとう」と言ってくれるかい？」

ベッドで眠っているなずなを起こさないように、緋雨はなずなの頭をくしやりと撫でる。

「父さん、母さん……僕はこの娘のためにもう一度がんばってみよう」

それは、自分に対する誓いの言葉であつたのだらう。自分のように、もう手遅れの間人とは違ふなずに、人並みの幸せを知つてもらいたいという緋雨の願いであり誓いでもある。

「ありがとう……ありがとう、ひさめ……」

「カタルシス……か。なずな、君は僕の心に溜おりまつた澱を浄化してくれる。僕も君にありがとうって言つよ」

その言葉に反応するように、なずなは小さく可愛らしくくしゃみをし、寝息を立てて気持ちよさそうに眠りつづける。

緋雨が久しぶりに感じた人の温かさは、こんなにもすぐ近くにあったのだ。

2 日常パラノイア

2 日常パラノイア

水城緋雨が桂燈なずなを眠る姿を見守っている丁度その頃、起源開発都市に複数存在する救急搬送受け入れ病院に一人の男が運び込まれていた。

その男は不思議なことに、腹部には深く切り裂かれたような傷があると言うのに血が一切流れていない。そこに見えるのは生々しく切り裂かれた傷痕と、血の気を感じさせない肉の壁だけだ。しかし、その傷口すらも既に塞がりつつある。

「おい、医者。とつとと輸血しろ……血が足りねえんだよ」

何かに飢えている獣のような瞳で睨み付けられた医者は、眼を合わせた瞬間に自分の意思とは関係なく、男に言われたとおりに輸血の準備に取り掛かる。

この男——前ノ蔵^{まえのくら}眷属の起源は『支配』

自分と対等、もしくはそれ以下の無機物、有機物、意味に対する絶対的な支配能力。それが前ノ蔵眷属の『支配』という起源がもたらした力である。

それはつまり、他者の起源すらも支配することが可能な力であった。それゆえに彼は最強の称号を手にすることを目的にした。最強と言う称号を手に入れるということは、あらゆる起源を意のままに操ることが可能になるということ。

「俺はいつから勘違いしてたんだろうな」

井の中の蛙大海を知らず。

己が魂に刻まれた情報は誰よりも優れたものであると信じ込み、この起源開発都市にきた彼は身をもってその言葉の意味を痛感した。今まで誰にも負けたことが無かったのは己の世界が狭かったから。

新たな世界で幾度の敗北を味わい、辛酸をなめる事となった彼は、己の浅はかさと無知を知った。

だから彼は只管に戦い続けた。

自分を優れた人間だと知らしめるためには、

誰よりも強いということを証明すること他ならない。

それでも自分より強いものは数え切れないほどに居た。そのたびに戦いを挑んでは勝利を重ねてきた。だから勘違いしてしまった。

——弱者であつた自分はもう居ない。

そう誤解するようになっていたのはつい最近のことであつた。

「でも、ようやく思い出したぜ……」

己の力に溺れていた彼はもう居ない。ここに居るのは初心を思い出す事のできた眷属と言う男だけ。

日常的に自分を強者だと驕っていたパラノイアを抱くことはもう無いであろう。

「俺は一からやり直すんだ。弱者を踏みにじる強者を俺は捻じ伏せる——それが俺の想いだつたんだ」

徐々に血色の戻りつつある身体を救急搬送されたベットから起こし、近くに置いてあつた自身の靴を手に取り、それを履く。

輸血のために刺された針を腕から抜くと、彼は自分の足で病室を後にする。

その足取りは決して軽いものではなかったが、一步一步を確かに踏みしめ歩いている。そんな時、彼の塞がりつつある傷口に何かが衝突してきた。

「——ハ？」

その衝撃で彼の塞がりつつあつた傷口は微かに開き、彼の着ていた服の腹部に血が滲んだ。

「痛いなあもう。ちゃんと前見て歩かないとだめなんだぞあ？」

「あのなあ……どの口がそんなことを言つてんだ、女。よく見る、

塞がってきてた傷口が開いちまっただろうが！」

眷属はぶつかってきた女の物言いに我を忘れて怒鳴りつける。女はそれを煩そうに聞き流しながら「ごめんごめん」と言って走り去ってしまった。

「なんだったんだよ、あの女は——」

眷属が怒りを通り越して呆れようとしたとき、彼にぶつかって走り去った女の悲鳴が夜の病院の通路に響いた。

「チツ……今日は本当に厄日だ」

激しい運動をすれば開いてしまうであろう傷口を摩りながら眷属は進行方向とは逆に向き直り、悲鳴のした方向に歩く。

（まあ、たまにはいいか……）

しかし、悪態をつきながらも嫌そうな顔はせず、眷属の気分は悪いものではなかった。

「おい、女あ。せめてもう少し誠意の籠った言葉で謝るのが筋つてもンだろうが！」

突き当たりにあった病室の扉を勢いよく彼は蹴り倒す。その部屋の中では先ほどの女が啞然と口を開いてこちらを見ていて、それを囲むように存在する三人の男は殺意の籠った目で彼を見ている。

「なんだお前ら？ 俺はそこの女に用があんだよ……邪魔すんなら容赦しねえぞ」

眷属の言葉を聞いていた三人のうち一人が彼に向かって、見下すかの口調で話しかけるものがいた。

「おいおい、坊主。物事には優先順位つてものがあるんだ。後からおいそれとやってきた人間になんだかんだ言われる筋はねえんだよ」「な……に？」

「だからよ……今なら見逃してやるって言つてんだよ坊主。お前だつて命は惜しいだろ」

強者とは弱者に対して関心を示さないものである。それは、今までの眷属が身をもって体感してきたこと。

——ならば

「はン、掛かってこいよ自惚れ野郎共」

負けることは無い。いかに三人相手であろうとも眷属にとって数の差は大した物ではないのだから。

「アジーン、ドヴァーやれ。俺は任務を遂行する。殺すなよ」

アジーンと呼ばれた大男と、ドヴァーと呼ばれた瘦躯の男は立ちふさがるように彼の前に立つ。

「なんだ、逃げんのか？」

「安い挑発だな」

アジーンとドヴァーに命令をした男は、眷属にぶつかった女を肩に抱えると窓を開けて飛び降りる。

「戦うよりも任務遂行が大事なんでね。それが仕事人ってもんさ」
眷属はそれをすぐさま追いかけてようとしたが、アジーンとドヴァーに行く手を阻まれて追いかけることができない。

「ア、アニキに命令されてるから通すわけにはいかないんだな」

「ワリイがここで眠ってくれや坊主」

アジーンは手から大きな炎の塊を出し、それを眷属に向かって投げつける。

（炎の起源覚醒者が……けど、こんくらいなら安いもんだ）

「仲間の能力で眠ってる」

眷属は襲い掛かる炎の塊を『支配』すると、触れることなく弾き返す。

その異変に気がついたのは使用者のアジーンではなく、隣で立っていた瘦躯のドヴァーであった。

ドヴァーは横に飛びのくと手に大きな氷塊を作り出し、アジーンに迫る炎の塊に投げつけて相殺する。その際に一瞬にして蒸発した氷の塊から噴出された水蒸気でアジーンとドヴァーは眷属の姿を見失ってしまった。

「いい能力だな……だが、俺にはおよばねえ」

炎の塊と氷塊がぶつかる瞬間に、病室の窓から飛び出した眷属は

空中で呟く。今思えば、彼が飛び出した病室は六階であり、かなりの高さがあった。

だが、彼の起源である『支配』にそんなことは関係ない。六階から地上までの距離、役19・16メートルの距離を支配し、距離をゼロにする。

眷属の起源である『支配』は、他の能力とは違って凡庸性が高いのである。制限こそ厳しいものの、その限られた範囲の中であるのなら間違いなく最強の能力である。

着地の際に足に掛かる衝撃を支配し、全て地面に受け流す。そのせいでコンクリートの地面に罅が入るが眷属にとって知ったことではない。

「さあて、どこに逃げやがったんですかねえ……なんて言うとも思ってたのか」

彼は病院裏の路地裏……正確にはその入り口に存在するワゴン車の方に向かって声を投げる。

「へっ、ガキの癖にいちいち勘の鋭いやつだ……なあ坊主、お前は どうして俺たちの仕事の邪魔をする？」

「仕事の邪魔だあ？ そんなン知ったこっちゃねえよ。俺はお前の抱えてる女に用があんだ」

彼にとって、理由なんてものはただの気まぐれに過ぎない。眷属は気に入らないことをただ潰しに來ただけなのだから。

「そんな程度で他の人間の人生を台無しにするつもりなのかよ、坊主」

「他の人間の人生を台無しにするだあ？ テメエ、まずは自分のしていることを見てから言うんだな」

一歩、また一歩と眷属は女を抱えた男に近づいていく。

「そりゃそうだった。それで、俺をどうするんだ？」

「ソイツを俺に渡せばよし、そうじゃなければなんて言う必要はねえよな？」

「質問に質問で返すのには感心しねえが……確かにそうだ」

男は抱えていた女を地面に降ろすと、そのまま一気に後ろへ飛びのく。

「なんだ、随分と素直じゃねえか」

眷属の言葉に男は微笑を漏らすと、いたって普通に言葉を返してきた。

「流石に一人で『支配者』に逆らうほど愚かじゃねえさ」

「デメエ！」

「次は相応の準備しといてやるからよ」

そういい残して、男は自分の影に溶け込むかのように消えていた。
「クソ……意味のわからねえ厄介事に首を突っ込んでしまったかねえ」

男が消えたのを確認してから、眷属は小さく呟く。そして、地面に横たわっている女の頬を平手で軽く叩く。

「おい、起きろクソ女」

「んん」

ぼわぼわとした表情をしたままなかなか起きない女に、眷属は若干だが苛立ちを覚え始める。

「おい、ビッチじゃなかったら起きやがれクソ女」

「だーれがビッチだあ！」

「反応してんじゃねえよ！」

「あれ？ さっきの口の悪い少年君じゃないの……もしかしてお姉さんの色香に引かれて追いかけてきちゃったの？」

会話が全くかみ合わないことに、先ほどの苛立ちは完全に消え去り、どちらかと言うと呆れ果ててしまふ眷属である。

「めんどくせえ女だな……コイツ」

「コイツじゃないぞ少年。お姉さんには結衣と言う名前があるんだぞ」

「マジで厄日だ……今日は」

眷属は背中に結衣の声を浴びながら、夜の街に消えていく。

眷属の日常パラノイアはいつになったら消え去るのだろうか。

それは、これから先の彼にしかわからないことである。

3 始まりのゲシュタルト

3 始まりのゲシュタルト

窓から差し込む日差しの輝きに気が付き、瞼を閉じて座っていた緋雨は目を開く。

隣ではつい先日助け出した不死の少女、桂燈なずなが眠っているベットがある。手を伸ばせば届く距離に――

「あれ……なずなが居ない？」

緋雨はその異常に気が付き、その場でがばっと立ち上がる。そして部屋の中を確認するが、緋雨はなずなの姿を視認することはできなかった。

「この匂い……まさか」

普段はほとんど使用することの無い台所から卵の焼かれる匂いが漂ってくる。

そこで一つの疑問が発生した。

（なずなのやつ……料理できたのか？）

全く見当違いな疑問であった。本来、ここで思い浮かべるような疑問はそちらではなく、どうやってなずなは緋雨に気づかれること無くベットから抜け出し、台所に行ったかと言うところである。

だが、緋雨はそんなこといざ知らずに台所に入った。

「おはよう…緋雨。まって、もう少しでできるから」

小さな身体を必死に動かし、フライパンを巧みに操るなずなの姿は今まで囚われていたとは思えないほどに精錬された動きであった。しばしの間、緋雨は我を忘れてその姿に見入ってしまう。

「どうしたの？」

なずなはそんな緋雨の姿を見て、怪訝そうな表情をして問いかける。

「い、いや。料理なんかできるんだなって思ってたね」

「そんなに不思議なの？」

緋雨はそんななずなの視線に耐えることができずに、苦し紛れにこう尋ねるのだ。

「何か手伝うことは無いかな？」

「大丈夫だよ。本当に後ちよつとだから」

綺麗に焼かれた卵焼きが準備されていた皿の上に載せられる。その他にも、よく見れば冷蔵庫に余っていたであろう野菜屑で作られたサラダや、トマトで作られたスープがあった。

果たして、なずなは何時時間前に起床して料理をしていたのだろうか。そんなことを頭の隅で緋雨は考えながらも、最後までなずなの行動を見守っていた。

「あのね、一つ聞いてもいい？」

「どうしたんだい？」

ほとんど使われてなかったテーブルの上に所狭しと並べられた朝食の数々を前に、テーブルを挟んで緋雨はなずなに再び問いかける。

「緋雨って今までどんなもの食べていたの？」

「コンビニ弁当とか外食、あとファストフードで済ませたり、食べなかったり……それがどうかしたのかい？」

起源を覚醒させてからと言うものの、緋雨の食事はだんだんと簡単なものに移り変わっていった。

その理由としては、今でこそはそうではないのだが血を飲んだ後に物を食べることに抵抗を持っていたからである。あの血なまぐさい飲み物を口にした後にはとてもではないが口に物を入れる気にはなれなかった。

下手をしたら、食事の最中にそのまま戻してしまいそうで……

「ダメ……これからは私が作るから、ちゃんと毎日食べて」

「はあ……」

「食べるんだよ？ 約束して」

正直な話、能力を使用した日以外ならその提案は緋雨にとって魅力的なものである。

今まで無駄に食費に掛かっていた分の金を減らすことができ、わずなの安全も確保できるからである。

だがしかし、毎日と言うことは起源能力を使った日にも食べなければならなくなる。出来る事なら起源能力を使用したその日には食べたくは無いのだが――

それが緋雨の考えであつた。

「いいけど……どうしても食べたくない日は勘弁してくれないかな？」

「食べたくない日？」

「うん、そんな日もあるんだよ。だから、そんな日は許してくれるかな？」

緋雨がそう答えると、なずなは精一杯考えるような素振りをしたが、結局理解できなかったのか不思議そうな顔をして答える。

「よくわからないけど……わかった。そんな日もあるんだよね」

「ありがとう、なずな」

につこりと、緋雨がなずなに微笑みながらそう答えるとなずなは緋雨に微笑み返した。

もともとなずなの顔は可愛げのある顔立ちなのだが、なずなの不機嫌ではないがどこか達観しているような表情のせいでわかり難いだけなのだ。

そんなことを緋雨は頭の中で思いながら、綺麗に焼かれた卵焼きを一つ箸で掴み取ると口に運ぶ。

それを見ていたなずなは心配そうに緋雨に尋ねた。

「おいしい？」

愚問であつた。今まではコンビニ弁当やファストフードのような誰が食べてもそれなりに美味しいと言うようなものばかりを口にしてきた緋雨にとって、誰かのために作られた料理と言うものは聞かれるまでも無く美味しいのだ。

だからこそ、緋雨は屈託の無い言葉で答えることができる。

「うん、美味しいよ」

「よかった……こっちも食べてみて」

こんな毎日が、こんな日常が続けばいい。

そんなことを思いながら、彼はなすなの作った手料理を口に運ぶのだった。

緋雨は後悔していた。特に食べる必要も無い朝食を食べてしまったことに。

それもそのはずだ。味覚が旨いと判断したものを胃に収めた状態で、俗に言う満足している状態で不味い物を口にしたらどうなるかももちろん、身体はそんなものを受け入れることなく押し戻そうとする。

つまるところ、緋雨は桂燈なすなを取り戻しにきた起源覚醒者と戦うために輸血パックから血を摂取したのだ。

今の彼の気分は最悪である。久々に心のそこから美味しいと思えたものを食べて満たされていたというのにも関わらず、心配していた出来事が起きてしまったからだ。

「緋雨……気分悪そう。顔色悪いよ……」

緋雨の腕の間に挟まる形で抱えられているなすなは、明らかに顔色の悪くなった緋雨の表情を見て心配そうに尋ねる。

「大丈夫だよなすな。いつものことだから」

それに対し緋雨は、平常を装って言葉を返すことしかできない。

空腹時に摂取する血は緋雨に高揚感を与えてくれるが、食後ほど萎えるシチュエーションは無い。

だから、緋雨としてはさっさと撃退もしくは殺してしまって家でゆっくりと休みたいのだが……

「瞬間移動か……また厄介な敵が来たもんだ」
テレポーター

彼ともっとも相性の悪い敵が襲撃してきたのである。

もっぱら、緋雨の能力は直接戦闘に大きく偏っている。身体能力

の底上げや肉体の復元、血液の流体操作など……それも、全ての能力が2ランクほど落ちている状態だ。

本来、彼の能力は他者から直接血を摂取するという条件がある。だが、彼は輸血パックによる不完全な覚醒状態で戦っている。

よって、魔血の生成量も減少し貧血が常が続いている状態なのだ。つまり、顔色が悪いのはいつものことであるというのはあながち間違ではないのだ。

（傷つけるモノで一撃入れることができれば赤き血を吸うモノ（デアルグ）で完全覚醒できるんだけど……相手は遠距離からのちまちました攻撃）

「仕方ない……少し骨は折れるがアレを使うとするか」

「緋雨…アレってなに？」

まるで抱きかかえられている猫のような状態で、なずなは緋雨に尋ねる。

「あ…あんまり見ても気分のいいものではないから、見ないほうがいいと思うよ」

「うっん、大丈夫だよ。緋雨は緋雨だもの」

「なずな……でも、ダメだと思ったたら目を瞑るんだよ。わかったね？」

「……うん」

そついうなり彼はベルトに着けてあるホルスターからナイフを取り出し、自分の手首を淀みない動作で引き裂く。

その光景になずなは一瞬、目を閉じてしまいそうになるが、先ほどの言葉は嘘ではないというようにしっかりとその光景を目に焼き付けている。

「ティンダロスの獵犬——」

絶えず手首から流れ出る血は犬のような形になっていき、最後には完全に狼の姿となって緋雨の足元に完成する。

その途端に先ほどまで流れていたおびただしい量の血液はぴたりと流れなくなり、引き裂かれた傷口だけが生々しく残っている。

「緋炎、僕を狙ってくる覚醒者の位地を把握できるかい？」

ちよつとした貧血状態になりながらも緋雨は自分の血液で作り出された獵犬、緋炎ひえんの頭を軽く撫でる。

緋炎は自分の主の言葉を理解したのか颯爽と駆け出してゆく。

「緋雨……辛そうだよ。大丈夫？」

「ちよつと厳しいかな……なずな、少し目を瞑っててくれないか」

「……分かった」

緋雨の言葉に従い、なずなは目を閉じる。それを緋雨は確認してから、あらかじめ複数用意していた輸血パックのうちの一つを手に取りると、一瞬だが飲むことを躊躇ってから一気に飲み干した。

先ほどよりは幾分かマシな状態であるが、やはり味は最悪である。胃から競りあがってくるものを一緒に飲み込みながら、緋雨は魔血の生成に集中する。

（輸血パックじゃダメだ……なずなの血、きっと美味しいんだろうな）

極度に生き血を吸わないでいると時折、思考を支配するほど強くなる吸血衝動を抑えながら、緋雨はなずなに優しく言葉をかける。

「もう、目を開けてもいいよ」

「うん」

それと同時に、緋炎の遠吠えが聞こえてくる。緋雨は即座に遠吠えの聞こえてきた方向に向き直ると走り出す。

その間もなずなは心配そうに緋雨を見つめ続けている。

（信用されてるのかな……僕は。それは嬉しいことなんだろうけど、複雑な気分だ）

それから少し走り続けたところに、緋炎に襲われている人間を発見することができた。

（全員を助けられるなんて思わない。感謝されるなんて思っていたこともあった……けど、そこにあったのは裏切りと絶望だけ。助けってきたというのに誰一人として助けようとはしてくれない。それが

この世界の真実。だから、僕はたった一人の為だけに生きようって思った」

「クソっ、クソッ！ 離れるよこのクソ犬があ！」

「クソ犬呼ばわりとは酷いな…… 緋炎、戻っておいで」

緋雨が緋炎にそういうと、緋炎は一つ吼えたと文字通り緋雨の傷口から体内に戻っていった。

半身にあたるほどの密度で生成した獵犬・緋炎を体内に戻したことによって魔血の密度が上がり、先ほどまでとは比べ物にならないほどの力が身体に戻ってくる。それでも、生き血を吸ったときほどの状態に達することはなかった。

「なっ、オリジン…… ブラッド!?」

「何も驚くことはないだろ、命を狙うってことは否応無しに自分の命も狙われるってことだ。ただ、変わったといえば狩られる側になっただけのこと。さっきまでと何も変わってないさ」

手首の生々しい傷口を相手に向けて、緋雨は手のナイフを生成していく。

「な、なあ、取引しようぜ。アンタにだって悪い話じゃねえからさ」

その言葉に緋雨は少し考えてから、何か思い当たったのか

「……言ってみろ」

そう一言だけ告げてから手を下ろす。

「か、感謝する。アンタは俺を見逃すだけで良い。俺はアンタの聞きたいことに答えられるだけ答えるのでどうだ」

緋雨はなすなの耳を手で押さえ、なるべく会話が聞こえないようにしてから答える。

「分かった。誰に雇われたのか教える。その周辺組織も——」

その瞬間、瞬間移動使いの男はにやりと笑ったかと思うと、何の前触れもなく数メートル後ろに移動していた。

「ギャハハ、誰がテメエなんぞに情報を漏らすかよ！ 善人面した化け物がよお！」

「そうか…… けどな、それくらいこっちだって考えてたよ」

「なっ！ テメエどうやって!?」

男は緋雨の足元を見て絶句した。何の感触も感じていなかった右足に、赤い液体状の紐のようなものが巻きついていたのでから。

「もう君にチャンスはないよ…… 大事な一度限りの交渉権を失ってしまったんだからね」

まるで答えるつもりはない。そういわんばかりの口調で緋雨は男に答えると、男の足に絡みつかせている物体に形状変化の命令を指示する。

その瞬間に絡み付いていた紐状の物体に棘が生えて男の足を串刺しにする。

「オリジンブラッドオオオ！」

親の敵を見るような目で男は緋雨にそう叫ぶと、手当たり次第に回りにあるものを緋雨に向けて瞬間移動させて押しつぶそうとする。

緋雨は次に起こす光景をなずなに見せないよう、胸に埋める様に抱きかかえなおす。

「我の命の水は全てを覆う」

呟くとほぼ同時に、緋雨の傷口から血液が噴出すように流れ出て、本体を守るかのように球体を作っていく。

「なっ！」

瞬間移動によって飛来してきた物質はことごとく血液の壁に阻まれ、緋雨に何のダメージを与えることすら叶わない。

「不意打ちでしか相手を狙えない人間が真つ当な勝負を井戸mことが間違ってたんだよ…… 僕なら、見つかった時点で逃げるのに」

そんな絶望を瞬間移動使いの男は抱きながら、緋雨の手によって意識を刈り取られた。

「ねえ… 緋雨、終わった？」

それを肌で感じ取ったのか、なずなは埋めていた顔を上げて上目遣いに緋雨に尋ねる。

緋雨はにつこりと笑って、頭をゆっくりと縦に下ろした。

その笑顔は戦いに勝利した安堵から来るものなのか、それとも戦

いの快感の余韻を味わっていたから出てきたものなのか、はたまた
なずなを守りきることできた達成感から来るものなのか……

緋雨はどの感情から来ているのか釈然としないまま、本来の目的
であつたなずなとスーパ―で買い物をするという目的を果たすため、
なずなを地面に下ろし、横に並んで手をつないで歩くのだった。

4 衝動のAspect

4 衝動のAspect

「身体が重いなあ……」

それが買い物の最中に緋雨がぼそりと溢した言葉であった。あの後、戦闘が終わると同時に酷い脱力感が緋雨の身体を襲っている。時間はまだ午後1時過ぎで、一日が終わるまでにはまだまだ時間がある。すぐ隣のほうを見ると、今日の夕飯のメニューを考えながら材料を選んでいるであろうなずなの姿がある。

「どうかしたの？」

不意に隣から不安げな声をかけられて、緋雨は慌てて表情を取り繕う。

「いや、なんでもないよ、なずな」

買い物カート越しになずなと目が合う。

「そう……」

納得していないと言うような声で答え、なずなは少し背伸びをして緋雨の顔をまじまじと見る。

「な、どうしたんだよ、なずな」

「よく分からなくても……嫌なことってあるんだよ」

問いに目をそらしながら答えた緋雨の頬に、間近から吐息がかかった。

「え？」

緋雨が視線を戻すと、頬と頬がくっつくほど近くになずなの顔があつて、緋雨は妙な罪悪感に囚われた。

「いや、僕にはちよつと分からないかな」

「あの人も…同じ顔をしていた」

緋雨の要領を得ない言い訳を無視して、なずなは悲しげに息を吐いて顔を離れた。

「私には相手のことを理解してはあげられないのかな」

ほっと息を吐く緋雨の隣で、なずなはふと瞳を伏せた。整った長い睫毛に悲壮を含んだなずなの表情は、どこか諦めてしまっているようにも見えてしまう。

「……うつん。私にだって、今度こそできるよ」

だが、そんなたずまいも一瞬のことだった。なずなはすぐにいつものような表情を取り戻し、食品棚に並んでいる食品に目を向ける。

「ところで、今日の夕飯は何かな？」

「緋雨は何が食べたいの？」

「え、僕かい？」

「うつん。お金も全部緋雨が払ってくれてるんだから、緋雨の食べたいものを作りたい……今までもそうだったから——」

なずなは緋雨に顔を向けなおすと、手に持っていた豚肉を商品棚に戻す。

「今までも？」

「うつん、なんでもないよ。緋雨はどんなものが食べたいの？ 難しくないものならある程度は作れるから……何でも言って」

「じゃあ、なずなの得意料理を作ってくれるかな」

緋雨がそう答えると、なずなは納得したように食品の並ぶ陳列棚に目を移す。

緋雨はそれを確認した後、スーパーの店内を意味もなく見渡す。今までが嘘のように日常的な光景。この光景こそが、彼の欲していたのではないかと内心で自嘲する。

「よく分からなくても嫌なことってあるんだよ……か」

緋雨は今まで店内を意味もなく見渡していた瞳に瞼を降ろすと、何かを小さくぶつくさ呟いているなずなの声が彼の耳に聞こえてきた。

「確かに……分からないこともないかな」

見知らぬ誰か……いや、自分と仲良くしている人間から血を吸う

という映像が頭の中に映し出される。

その相手は誰もが恐怖の目で彼を見つめている。そんな数え切れるほどに少ない吸血の記憶。これから先にも起こるかもしれない事を恐れているうちに、彼の吸血衝動はどんどん駆り立てられていく。

もしかしたら、もう限界なのかもしれない。

そんなことを考えると、彼の心は壊れてしまいそうになる。

だから彼は自分を偽る。

『僕』は『俺』であり、『俺』は『僕』であるというように。

「だから僕は……誰かから血を奪うことが怖いんだ」

「見つけたよ、オリジンブラッド！」

「なっ——」

声が聞こえると同時だった。その中性的な声の主は音もなく緋雨の首根っこを掴んだ。緋雨の息がつまり、両足が宙を掻く。声の主は片手の握力と腕力だけで緋雨を持ち上げている。

「クッ——あッ!？」

「緋雨っ!？」

さらに緋雨の驚愕となずなの悲鳴が重なった。声の主は持ち上げた緋雨を振り回し、かたわらの陳列棚の刃物置き場に叩き付けた。

「があ……ッ!——」

防護ガラスが割れ、砕け散る。複数の包丁が叩きつけられた緋雨の背中に突き刺さった。その際に持ち歩いていた全ての輸血パック破裂したのだろう、夥しい量の血液が床に広がっていく。

緋雨は背中に突き刺さった包丁の痛み顔に顔を歪めながら、無事な輸血パックは無いのかと服の中に手を戻す。

——なんだよ……無いのか？ これじゃ……起源能力が使えない……!？」

突然口内に広がった血生臭さは思ったよりも嫌なものではなかった。その血生臭さは、初めて口にする自分の血の味だったから。

「逃げてくれ、なずな……」

「やめてくれるかなあ。手間なんだよ、逃げる相手をいたぶるのってさ！」

そう言葉を発した瞬間、なおも声の主は緋雨を血に浸った刃物の散らばる床に叩きつける。緋雨は声の主に手をかけた。が、魔血の力も何も無い緋雨が力をいくら箠めようが、微動だにしない。

「あ……グウ……！」

頭に酸素が十分に回らなくなってきたのか、緋雨の身体がびくびくと痙攣を起こす。

「ほら、どうしたんだよ。前はもっと強かったのになあ」

「お前……まさか……」

「へえ、僕のこと覚えていてくれたんだ。少し嬉しいなあ……けど、あの時の言葉の通りに僕は文字通り『覚醒者千人を同時に相手取って倒せるくらい』に強くなった。どうだい、これが君の言っていた力なんだろ！！」

感情を顕わにし、ケタケタとせせら笑いながら細身の少年は血まみれの緋雨に言葉を投げる。

「ベリス・フレイマー……どうして、お前……が！」

「どうしてだって？ おかしなことを言うんだねえ。僕がここに来たって言うことは分かっているだろう、君の壊滅に追い込んだきた組織は一つになっただけだよ。そう、『創造』の起源を持つあの方の組織に集結する形でねえ！」

両手を広げ、誇らしげに語るベリス・フレイマーは、そこでもうやく緋雨から手を離れた。

「なっ……アイツは僕が確かに——」

「心臓を喰い千切った……かい？ ハハハッ！ 滑稽だねオリジンブラッド。あのお方が”たかだか”心臓を喰いちぎられただけで本当に死ぬとでも？ 脳が生きているのに能力を使用できないとでも？ 笑っちゃうなあ……本当に可哀想なくらいに馬鹿だよアンタ」

なずなを蚊帳の外に、緋雨はベリス・フレイマーと呼ばれた男と会話を進めていく。

「だけどね、降りかかる火の粉はどんなに小さなものでも消火しておかないと危ないだろ。それに、あのお方はその少女も欲しいらしくてね。だからおとなしく死んではくれないかなあ」

その瞬間、先ほどまでケタケタと笑っていた表情が殺意に溢れたものになる。その殺気に当てられたのか、なずなはへなへたと倒れて気を失ってしまったている。

「断わる……！」

だが、緋雨は諦めるわけにはいかなかった。

彼の欲しかったものもまた、彼女しか彼に与えてくれない。

（もう……失うわけにはいかない。守りたいって思ったんだ）

「じゃあ、死ねよ」

途端、まるで興味がなくなったかのようにベリスの瞳は輝きを失っていき、濁っていく。

そして、先ほどよりも早く緋雨の首を片手だけで持ち上げるとギリギリと締め上げてゆく。

「ぐ……あ……」

だが、その状況こそが緋雨にとっての唯一の打開策を取る為の好機であった。

傷口から滲み出ている血液を限界まで圧縮し、高圧にして一気にベリスに噴出する。そして、あわよくばその際に赤き血を吸うモノ（デアルグ）で血液を奪い取り魔血を精製する。

「随分と弱くなったんだな、オリジンブラッド」

相手を殺す瞬間と言うものには必ず、どんな人間であれ油断してしまう。その瞬間が今だった。

「お前も……最後の最後に油断した様だな！」

緋雨が叫ぶと同時に初めてベリスの眉間に皺が刻まれた。限界まで圧縮した血液による一撃は確かにベリスの身体を貫いたようだ。

「オリジン……ブラッドオッ！」

ベリスが吼え、その瞳はほとんど黒く染まってゆく。

「これが失敗していたら僕は間違いなく死んでいたよ……けど、最

後の最後にお前は油断した」

緋雨から放たれた血液の一撃は体内に戻っていく。その途中にあるベリスの生き血を奪い取って。

「またその眼か……またアンタは僕を見下すのか……その眼が——
——またっ!？」

恨みがましく叫ぶベリスだったが、緋雨の見下すような表情を見て固まってしまう。なぜなら、その口内からは鋭く尖った牙が姿をのぞかせ、その瞳先ほどまでの日本人特有の黒から真紅に変わっていたのだから。

「新鮮な血液は僕を化け物に近づかせる……だから僕は輸血パツクしか使いたくなかった。けどね、なずなを奪われるくらいなら僕は自ら望んでこの化け物の姿になろう!」

「ひ……ッ!」

ベリスは声を上げる余裕すら喪った。自らを化け物と呼ぶ緋雨の冷酷な瞳に全てを見透かされているような錯覚を覚え、恐怖した。緋雨の身体からは先ほどまで流れていた血液が消えるどころか、生々しかった傷口すら見当たらない。

「僕が恐怖している……? 馬鹿な……。そうだ……だったら——
——女あ!」

圧倒的な力からベリスは逃げ出すと、一直線に気絶しているなずに駆ける。だが、不意に身体が重くなった。

「え……ぐっ!？」

ベリスの背中から胸を自分ではない誰かの腕が貫通し——心臓が挟り取られていた。

その後ろで緋雨は、赤い涙を流していた。

5 進撃のラグナロク

1

どことも知れぬ場所——そこは薄暗く、憂鬱になりそうなほどに広い部屋であった。高い天井はドーム型で、どこかの教会を思わせるような造りである。そんな薄暗い部屋を唯一照らしている明かりと言えばステンドグラスから差し込む極彩色の僅かな光だけである。

その遙か下、寸分の光すら差し込まない暗闇の中に、番号の刻まれた椅子が八つと、三人の男女が居た。

一人は茶髪混じりの黒髪を持つ蒼色の瞳をした少年、

一人は真紅の髪を持つ灼眼の男、

一人はロングの黒髪を揺らしながら黒い瞳を持つ女性

その全てに共通している箇所は身体のどこかに『蛇から羽の生えたような』刺青が刻まれていると言うところだけである。

そんな中で、茶髪混じりの少年が蒼い瞳を細めながら呟く。

「ベリスが殺された……か」

その言葉からはこれといった感情を汲み取ることはできなかった。起きた出来事ありのままに伝えた、そんな雰囲気がある。

そんな呟きのような声に言葉を返したのは灼眼の男だった。

「別にいいじゃねえか、所詮アイツはFキーパーだ。シグが眼を覚ますまでの代用品にすぎねえんだろ？」

「まあ……こっちの正式な部隊には何の影響もないんだけどさ」

その言葉に対し少年は気にした様子もなく肯定するだけだ。

「ねえ恭夜、ヴィシヤス……そんなことより、あの二人は本当に上手いと思うてるの？」

そんな二人の会話を、今まで黙って聞いていた女性が切り出すように少年と男に尋ねる。

その問いに先に答えたのは恭夜と呼ばれた少年だった。

「二人って言うのは『血』と『不死』のことかい？」

「ええ、それでいいわ。貴方ですら一度失敗したって言うのに、あの男に彼女を救うことが本当にできと思う？」

そんな女性の問いに、恭夜は一瞬考えるような仕草を取ってからすぐに口を開いた。

「陽菜、確かに僕は一度……それも取り返しの付かない一度を失敗してしまったださ。けどね、彼女には誰かが必要なんだ。それは俺じゃない誰かだった……それだけなんだ」

その声にはおおよそ少年から感じるこのできないほどに大きな悲壮感を感じる。

「ゴメンなさい……ただ、貴方の意思が揺らいでいないか確認したくってね」

陽菜はそう答えると、口を閉ざしてしまう。

そこで、先ほどまで恭夜と会話をしていた灼眼の男——ヴィシヤスは、再び口を開く。

「オレたちはいつからアイツのことを見守り続けているんだろうな……もう何度目だ？」

その口調は何かをしみじみと思いつているような声である。

「何度だって繰り返し返すさ。彼女が『不死』と言う『輪廻』の呪いから開放されるまで何度だって……そう決めたんだ」

「知ってる、ただ聞いておきたかっただけだ」

既に言うことは言ったというような風に言葉を区切ると、それつきりヴィシヤスは口を開くことはなかった。

「俺たちは彼女の壊れかけの心を直しながら成長させないといけない。そのためにお前は彼女に選ばれたんだ。水城緋雨……彼女を絶対に手放すな」

恭夜はその蒼い瞳を暗闇の中でうつすらと輝かせながら、部屋の

端にある最も暗闇の濃い部屋に向かって歩いていく。

ヴィシヤスと陽菜はその後姿が完全に消えると、ふっと溜息のような息を吐く。

「ねえ、ヴィシヤス？」

「なんだ陽菜。お前がオレに弱気な姿を見せるなんて珍しいじゃないか」

「今回こそ、今度こそ……私たちの役目は終わるのかしら」

そんなヴィシヤスの言葉に嫌味の一つ返さず、陽菜は言葉を返してきたためにヴィシヤスは押し黙る。

そして、数瞬の間が相手から憂鬱なほどに広い部屋の中にぼそりと言葉が漏れた。

「ああ、今度こそオレたちは……桂燈なずなを不変の滅びの運命から回避させる。それだけだ」

「そうね……。そろそろみんなも帰ってくる頃よ、私たちも仕事に戻りましょう」

陽菜はそういうと、恭夜が消えていった方向とは別の方向に歩き出す。

そして、この憂鬱なほどに広く薄暗い部屋には、灼眼の男——ヴィシヤス・クロウハートだけが、物悲しく立っていた。

「オレたち八人は失敗したけど……水城緋雨。お前はオレたち全員がアシストしてやる。だから、お前だけは間違ってもなずなを見捨てるんじゃないぞ」

そう呟くと、彼も暗闇の中に消えていった。

そして、憂鬱なほどに広く薄暗い部屋には誰も居なくなつた。

2

水城家の台所では以前と変わらずになずなが朝食を作っている。

まるで、この間の襲撃が嘘だったというように感じるほど、落ち着いた緩やかな時間が過ぎていく。

そんな穏やかな時間があるのは、緋雨が文字通り身を削るような想いで戦いに身を投じているからだ。

大切な者を守るために、自分自身が守ってきた何かを失う。

それが緋雨の今までの戦いであつた。

だが、先日 of 戦闘はどうだろうか。

彼は自分自身の想い——目的のために敵を殺し、相手から奪うことでその勝利を得た。

少し話は外れるが、勝利の条件とはなんだろう。

相對している敵を完膚なきまでに叩きのめすことだろうか？

それとも、莫大な富を得ることだろうか？

否、決してそうではない。

勝利と言う言葉において最も重要なことは、自分自身の持った目的を達成することにある。

ならば、先日の緋雨の勝利はその前提条件を満たすことになる。

しかし、彼の目的は『桂燈なずなを救う』と言う事象と『自分自身の吸血鬼化を止める』と言うものだ。

結果的に、あの状況でなずなを救うことはできた。しかし、その反面ではもう一つの目的である吸血鬼化の進行を止めるという目的を蔑ろにしまった。

つまり結論的に言うのなら、先日の殺し合いに勝者など存在しない。

「『不死』か……：そういうえば見た目こそなずなは少女って言う年齢だけど、実際のところは何歳なんだろう？」

そんな見当違いな疑問が緋雨の頭の中に湧いて来た頃……：なずなの料理が完成したのか、台所のほうから感じるこのでかい匂いが緋雨の鼻孔をくすぐった。

だが、それと同時に緋雨は思い出す。

あの味を。

「うおえ……思い出したただけであの行為には吐き気がする」

誰かの臓物を食べる行為に対して、嫌悪感を隠すことなく緋雨は呟く。しかし、嫌悪感があるのはあくまで食すことであり、血肉の味ではない。

魔血を生成していた状態の彼にとって、血液とはどんな酒よりも芳醇な味わいをもたらしてくれる美酒であり、肉は松坂牛よりも高級な肉にしか思えない。

だが、人としての状態の彼にはその行為が堪らなく嫌なことである。

「緋雨、ご飯で来たからテーブルの上のものを片付けて」

「分かったよなずな」

なずなの声に対し優しく言葉を返すと、緋雨は悔いるように呟いた

「自分でも分かるまで僕の吸血鬼化が進んでいるな……」

そんなことを呟きながらも、緋雨はテーブルの上に乱雑に置かれているチラシの数々を片付ける。

間もなくして、片付けの終えたテーブルの上には質素ながらも決して貧乏さを感じさせられない料理が並べられていた。

「いただきますって緋雨も言うんだよ」

「分かっているよなずな」

そして、テーブルを挟んで向かい合わせに座った緋雨となずなは両手を合わせ、口を揃えて呟く。

『いただきます』と。

恭夜がなずなの作った料理を美味しくいただき、朝食の片付けを終わらせてからなずなと一緒にテレビを眺めてから数時間後のことである。

雨雲に覆われた白昼頃、大きな旅客機の機影が雨雲で曇っている地上を更に暗くしている。

ジャステイス・エアライン308便は、黒いローブを纏った集団を機体いっぱい詰め込んで、曇天の空を横切っていた。

機首の先には、開発都市の街の明かりが遠くにうつすらと見えている。多少気流は荒れてはいるが、後一時間と待たずに彼らは開発都市に辿り着くはず、だった。

その時、不意にジャステイス・エアラインの機体の一部が弾けとんだ。

機体からは白銀の光が漏れ、その光が強まることに小さな欠片が空に舞う。そして、爆発音が鳴ったかと思うと今度は複数の小さな欠片が吹き飛んでいく。

それは、遠くから見れば小さな欠片であったが、実際には、その一枚一枚が一辺あたり二メートルを超えるサイズの耐圧隔壁である。「な…これはどういうことだ!？」

「耐圧隔壁の半分近くが吹き飛んでしまい、この機体は——う、ウアアアアアああ!？」

黒ローブの代表格らしき男の叫びは報告に来た黒ローブの悲鳴によって掻き消される。

「良いかお前ら、我々は現時刻を持って計画を破棄する!! 今すぐ各自この機体から脱出を——」

掻き消された声に気合を入れて、代表の男は現在の生存者たちに向かって計画の破棄を伝え、各々で脱出するようにとその旨を伝えたときだった。

「いいえ、貴方たちはここで朽ちてもらいます。僕たちの計画のた

めに」

突如、どこからともなく現れた帽子を被った茶髪の少年はその動きを制するように通路に立ちはだかる。

その間にも刻一刻と状況は変化している。残っていたシートの数々は爆発によって開いた穴に吸い込まれて消えていった。

「な、どうして……どうしてお前が……」

突風が吹き荒れる通路の真ん中で、ボロボロになったローブを纏った男が、全身に黄色い光を纏わせながら立ち尽くしている。既に背中のはうには一糸も残っていないローブはもはや何の意味も成していない。

「どうしてだ、アレン・グロリアス……ッ！」

ローブの男は首を激しく振り、ローブの袖口を引きちぎるように叫んだ。

茶髪の少年は、荒れ狂う暴風をまるで意に解さないように軽い足取りでローブの男に向かって歩く。

「もう、僕たちは繰り返させるわけにはいかないですよ。だから、後の災いの芽となる黒騎士候補生を開発都市に迎え入れさせるわけには行かない」

機体に開いた風穴の遙か先を遠い眼で見ながら、アレン・グロリアスは帽子を手取る。

「逝け、枢の断壁」

「何故だ、どうして絶対中立者の貴方が——」

ローブの問いかける声は、突如現れた半透明な壁によって聞こえなくなる。しかし、アレンはまるでその先の言葉を知っているかのように質問に答えた。

「言葉のままです。黒騎士はいずれ『不死』の起源を持つ彼女を必要とする。だから消すんですよ」

言い終えると、開いていた何も握っていない掌を閉じていく。それに連動するように、半透明な壁はローブを纏った人間を押しつぶし、圧縮していく。

「本来、壁のような守りの力は決して攻撃型の起源能力に勝つことはできませんが……使い方一つでいくらでも戦いに勝つ方法はあります」

最後にはせい六面体の小さな箱がアレンの手に載っていた。その六面体の中にはひしゃげたような、赤が滴っている。

アレンはそれをポケットに入ると、先ほど使用していた半透明な壁を敷くように展開し、機体から離れるように空中を滑走していく。

「恭夜さん……今度こそ僕たちは悲劇を目撃しないですよね？」

その遙か後ろでは、起源開発都市数キロ前にある海に墜落していくジャスティス・エアライン308便が燃えていた。

5 進撃のラグナロク（後書き）

スペックがなくなったために次回更新は未定です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9152y/>

オリジンブラッド・イモータル

2011年12月2日18時50分発行